Dental Anti-Aging

Dental Anti-Aging

華齢 Aging Science

日本アンチエイジング歯科学会誌
Official Journal of Japan Society for Dental Anti-Aging

Vol. 6
2013

ISSN 2186-3571

JSDA
Japan Society for Dental Anti-Aging
日本アンチエイジング歯科学会
http://www.jd-aa.net/

特別企画

対談

世界を席巻する
日本フィギュアスケート界の指導力

佐野　稔
（フィギュアスケート
指導者・解説者）

中原　悦夫
（常任理事・編集委員長）

●日時：2013年7月30日（火）
●場所：クリニーク デュボワ

歯科医療における実技教育の問題

中原　今回の大きなテーマは「食育」ということなのですが，佐野さんには，「教育」の視点に特化して，おうかがいしたいと思っています．

佐野　教育ですか？

中原　はい．というのは，歯科ではいま，歯学教育のあり方が非常に大きな議論になっていまして，一番の問題は，歯科医師を目指す学生に実技の経験を積ませるプロセスがないことです．

佐野　どういうことでしょう．

中原　以前は，大学在学中に臨床もできたんですが，法的な問題が指摘されて，十数年ほど前，歯科医師免許のない学生による治療行為は問題視され，模型による訓練と見学だけで歯科医師免許を取るようになりました．免許を取ると1年間の研修期間があるのですが，実技の訓練が義務付けられているわけではなく，見学だけで終わってしまうこともあるし，やったとしても，せいぜい抜歯を行う人がいるといった状態です．

佐野　何か，それは，すごくおかしな話ですね．素人だって，歯医者さんにとっては実技の教育は一番大事なはずだとわかります．

中原　おっしゃる通りです．法的には正しいあり方なのかもしれませんが，実情とはまったく合っていません．結局，歯科医院が独自に，新人の実技教育をしなければならないのが実情です．

佐野　それは問題ですね．

中原　ええ，そうなんです．それで，佐野さんに今回お願いしたのは，スポーツにおいても，教育，とくに実技の訓練というのは非常に大事な面があると思います．その点，長年，選手の育成に携わってこられた佐野さんには，技術を教える真髄がおうかがいできるのではないかと．加えて，スポーツ界でもいま，暴力の問題などで揺れているところがあります．スポーツ教育が抱える各種の問題を克服していこうと尽力されている佐野さんの姿勢に，何かヒントがいただけるのではないかと期待している次第です．

佐野　私はフィギュアスケートしかやってこなかった人間ですが，ご参考になるなら，なんなりと聞いてください．

Minoru Sano

- 1955年，山梨県生まれ．
- 4歳からスケートを始め，小学1年生で生涯の師・都築章一郎氏と出会い，本格的な指導を受ける．1972～76年，全日本選手権男子シングル5連覇．1973～77年，5年連続で世界選手権出場．1976年，インスブルックオリンピックに日本代表として出場．1977年，世界選手権で日本人初の銅メダルを獲得．この後，競技生活を引退し，プロスケーターに転向．
- 現在は，フィギュアスケート解説者，日本スケート連盟理事，日本フィギュアスケーティングインストラクター協会理事長，明治神宮外苑アイススケート場ヘッドコーチなど指導者としても活躍．

精密機械のような正確さが求められるジャンプ

中原　まず，おうかがいしたいのは，フィギュアスケートというのは，想像するに，非常に技術的に難しい競技のように感じているのですが，どうでしょう．

佐野　確かに，他のスポーツと比べていろいろな意味で特殊かもしれません．まず，氷の上というのは，普段，人間が生活している環境とはまったく異なります．陸上競技を始めるまでかけっこをしたことがない，という人はまずいないと思いますが，フィギュアを始めるまで氷の上をすべったことがない人は珍しくありません．

中原　確かに，最初は氷の上に立つだけで一苦労です．

佐野　その上に，ルールも独特です．たとえば，ジャンプでいえば，どんなに高くジャンプしても，どれだけきれいに回転しても，着氷するときには必ずどちらか一方の足で降りなければだめです．両足をついたら失敗とみなされる．こんな変なスポーツは，フィギュアスケートだけで

す．走り幅跳びだって，走り高跳びだって，踏切のラインさえ越えなければ，フォームはどうだろうが，着地がどうだろうが関係ありません．その意味で，フィギュアスケートというスポーツはまったく道理に合わないことを要求されていると思います．

中原　だからこその面白さ，競技としての奥深さもあると思いますが．

佐野　そうですね．スプリント競技のように，とにかくゼロコンマ一秒でも早くといったような明確な到達点があるわけでもないので，何をどこまでやればいいのかといった見極めが非常に難しく，成長の度合いも見えにくいんです．それだけにすごくたくさんのことを考えるし，やることも膨大．やってもやってもきりがない，まだ奥があるという感じです．

中原　技術的なものだけではなく，心の問題も大きいでしょうね．

佐野　はい，そうだと思います．もちろん，スポーツとメンタルは密接な関係がありますが，フィギュアの場合はさらに大きいと思います．たとえば，同じようなジャンプ技でも，体操競技は足の裏でマットの感覚をダイレクトに捉えるのに対して，フィギュアスケートは革靴を履いて，なおかつ，金属のエッジを介して氷と接しています．それだけに感覚が伝わりにくいんです．エッジは刃物のように鋭いので，極めて微妙な角度の違いがすべりに大きな影響を与え，本人はまったく同じようにやっているつもりでも，微妙な違いがでてしまう．そういう意味では精密機械のような正確さが要求されるのです．

中原　氷によっても違うんでしょうし．

佐野　違いますね．自分がいつも練習しているリンクと同じ氷というのは世界中にどこを探してもありません．国内だって東京の氷と名古屋の氷は違うし，まして海外に行くともっと違う．すべてのリンクにそれぞれの特性がありますので，大会のときなどは，いかに素早くそのリンクに対応するかというのも非常に重要です．

中原　おうかがいしていると，歯科との共通点が意外に多いですね．フィギュアは金属のエッジで氷を捉えますが，歯科医も金属のドリルで歯を削るのが仕事です．しかも，ミクロン単位の精密さが要求されるし，また，リンクがすべて違うように，歯というのも患者さんによって全部違うんです．

佐野　言われてみればそうですね．

中原　だから，新人を指導する厳しさも，いろいろな点で共通するのではないかと思うのですが．

暴力問題をスポーツ界はどう克服しようとしているか

佐野　共通しているかどうかはわかりませんが，確かに難しいですね．たとえば，私が見ていても，1年間ずっと練習をして，うまくなっているかどうかはなかなかわかりません．3年ぐらいすると，ああうまくなったなというのが実感としてわかるとか，そんな感じでちょっとずつ成長していくんです．

中原　気の長い話ですよね．

佐野　もちろん，技術的なコーチングポイントとか，カリキュラムというものもあるわけですが，それだけではなく，指導者によって個性があるし，生徒にだって個性がある．その中で，指導者は，生徒の個性を見抜いて，どういう形で引っ張ったらこの子は伸びるかというのを見ないといけない．

中原　いろいろな意味で難しくなっていますよね．私たちの学生時代だと，口腔外科は荒っぽいことで有名で，ちょっと間違えたら手が飛んでくるなんてしょっちゅうでした．それでも歯を食いしばってついていく根性のようなものがありましたが，いまの学生にはそういうたくましさはありません．

佐野　そこの問題も大きいですよね．私の育った時代も，まだまだ古いタイプの先生が多くて，殴られたり蹴られたりは日常茶飯事でしたよね．でも，私はそれで先生に対していま何かわだかまりがあるかというと，まったくないんです．いま思えば，先生だって殴るのはつらかったはずです．だから，確かに私は殴られましたけれども，殴る裏にあるものを感じとっていたと思うんです．いまは，ただ「殴った」という事実だけがクローズアップされて騒がれてしまっています．

中原　そのスポーツと暴力の問題についてですが，いまどうやってこの問題を克服しようとされているのですか．

佐野　まだまだ手探り状態です．私も暴力には反対ですが，いまの状況は単に手を出すか出さないかということ

を議論しているのではなく，手でたたくのはどうなのかとか，大声を出しちゃいけないとかいろいろ言われていて，じゃあ，大声ってどこから大声なのかとか，そういうわけのわからない，本筋とは違う方向に行っているように思えてなりません．

中原　問題の本質は，指導と単なる暴力の違いということだと思うんですが．

問題は暴力ではなくその裏にある本質

佐野　やっぱり，私は思うんですが，指導者と生徒というのは厳しい関係であるべきだと思うんです．暴力がいいわけではないけど，心を鬼にしてやらせるとか，甘えを許さないという厳しさの中で，強い指導というのも時にでてくる．それを生徒がどう思っているかというと，実は，学生にアンケートをとると，暴力を容認するという子のほうが多いんです．自分のプレー，考え方がいけなかった．それを気付かせてくれたおかげで，自分は成長できたと言っているんです．だから，問題は暴力そのものではなく，そこに，信頼関係があったかどうかだと思うんです．

中原　暴力はだめというのはいいとしても，先ほどおっしゃられたように，大きな声を出してもだめだというと，教える側が萎縮してしまわないですか．

佐野　実際，若い先生たちは，どうしていいかわからないと困っています．とくに，私たちの場合，生徒だけではなく親もからみます．若い先生たちというのはだいたい30歳前後ですから，そうすると，親たちがみんな年上なので先生たちも強く言えない．

中原　たとえ当事者同士で信頼関係が結ばれていても，まわりの同意が得られないこともあるわけですね．

佐野　そうですね．殴らなくても指導はできるって外野は簡単に言いますけど，それしかわからせる方法がないときも絶対あると思うんです．たとえば，赤信号で道路を渡ろうとしている人がいたら，声を荒げずに，手も出さずに止めるなんて余裕はないわけです．襟首をつかんで強引に引き戻すかもしれないし，「こら，危ないだろう」って大声だして止めるとか，それも暴力になってしまうとしたら，指導なんてできないと思うんです．

中原　そうしないと命にかかわりますからね．

佐野　スケートでも，エッジというのは研いであるので，包丁みたいに切れます．ふざけていると危ないんです．そういうときは，きつく叱ってやめさせなきゃいけない．それでも，きつく叱ったことだけを取り上げているのが最近の風潮です．

結果が得られないときにどうするか

中原　指導する側のレベルアップも必要ですが，同時に，教育を受ける側の姿勢というのも問うていいと思うのですが．たとえば，レストランでも，お客さん側が，金を払っているんだからと，何でもわがままを通そうとするのは正しい姿勢とは言えません．提供する側は，精一杯の努力をして誠心誠意，相手のために尽くす．そして，それを受ける側にもそれなりの礼を尽くすことで，文化が作られていくと思います．

佐野　おっしゃる通りです．スポーツ指導にしても，暴力だけを取り上げて云々するのは間違いだと思うけど，じゃあ，スパルタ式の，殴ってでも蹴ってでも教えるという昔のスタイルに戻すべきかというとそれも違う．時代が変わってきたわけだから，教える側も進化しないといけないけれど，それは教える側だけで完結することではなく，教えられる側と一緒になって作っていかないといけないものだと思います．

中原　そういう話でいうと，非常に感慨深いのは，医師と患者の関係もいま劇的に変化していて，昔は，医師が患者に対して一方的に医療を提供していたのが，いまは逆転して，どちらかというと医師が患者さんに振り回されてしまうようなことも少なくありません．かといって昔のスタイルに戻すわけにはいかない．医師と患者の新しい関係を築いていかないといけないところに来ている．そのときに，やっぱり重要なのは，疾患を治すという共通の目標にコミットすることだと思うのですが．

佐野　それは確かに，私たちの世界でいえば，なぜきつい練習をするのかといえば，試合で勝つためですからね．その結果が期待通りに得られれば，プロセスの問題も解消していくかもしれません．でも問題は，その結果に簡単にはたどりつけないことです．

中原　そうなんです．医療の限界もあるし，必ずしも患者さんが納得するような結果が得られるわけではなく，そこをわかってもらうのも難しくて．

佐野　答えになるかどうかわかりませんが，フィギュアスケートでも，優勝という一番の目標は，そんなに簡単に得られるものではありません．みんなそこを狙ってくるのに，結果的にとれるのは一人なんですから．だから，結果として3番になったり5番になったりします．だけど，私が生徒にいつも言っているのは1番になることが目的なんじゃない．そこにいたるプロセスが重要なんだということです．

中原　努力の積み重ねとか，そういうことですか．

佐野　もちろんそれもあります．だけどそれだけではなく，練習で培ってきたことをどれだけ出せるかです．たとえば，試合のとき，その生徒の持っている実力からする

生徒への指導の一部始終の音声を，胸に付けたピンマイクから，母親およびビデオカメラへ提供するという指導方法を採る佐野氏（明治神宮外苑アイススケート場の許可を得て掲載）

と，70点の滑りしかできなかったけれど，たまたま他の選手の出来も悪くて優勝したとします．そんなもの，偉くも何ともないんです．だけど反対に，練習でも10回に数回しか成功しない技を試合で完璧に成功させて，持てる力のすべてを出し切った．それは本当に人を感動させるし，もう順位なんてどうでもいいんです．

中原　優勝することを唯一の成功としてしまうと，失敗ばかりになってしまう．

佐野　そういうことですよね．もちろん，試合で勝つために練習するんですが，より重要なのは，常にプロセスなんです．目標を定めて修練を積み，昨日はできなかったことをできるようにする，そうやって少しでも成長し，試合で自分の持てるものをすべて出す．これは，人生すべてでそうだと思います．明確な目標を立てて努力し成長していく，そして，本番では絶対に手を抜いちゃだめなんです．生徒がすべてオリンピック選手になるわけでもプロになるわけでもない．だけど，そうして頑張ったことがきっとその後の人生の糧になる．そこが，生徒たちにもっとも学んでほしいなと思っているところですよね．

中原　そこさえぶれなければ，暴力云々もさしたる問題はないんでしょうね．

佐野　そこですよね．

自分が一番すぐれた指導をしているというプライド

中原　最近私も思うんですが，患者さんにブラッシングとか歯茎のマッサージの指導をしているとき，私の言うことから何かを感じてとってくれればいいなと思うんです．医者は，やれ一回15分ブラッシングしろとか言いますけど，患者さんだって忙しいし，それぞれにプライオリティの問題もあるわけです．仕事，恋愛，趣味とか，その中で歯磨きがなんて，最後の最後かもしれません．だから，普段は私の指導したことを忘れてしまってもいい．だけど，ちょっとしたときに，彼女ができたとか，娘さんに口が臭いとか言われたとか，そんなことがきっかけになって，私の言ったことをハッと思いだしてくれたらいい，それで少しでも人生の糧になればいいんじゃないかと思うようになりました．

佐野　そうですね，指導というのは一方向じゃないですから，受け取る相手の都合とか準備という部分ももちろんありますしね．ただ私の場合，常に大事だと思っているのは，自分は世界一の指導者だと思って生徒に接することです．そうじゃないと，生徒に対しても失礼だと思うんですね．世界で唯一のこと，一番うまい教え方をしているんだと，だからこそ，あとは自分が頑張れば世界一にだってなれるんだという自信もわくはずです．

中原　いい意味での教える側のプライドですね．

佐野　そうです．他の指導者に教わっても上手にならないよ，というのをいつも自分で持っていないと指導者は務まりません．その自信を維持するためには，指導者として常にレベルアップしていかないといけないし，一人ひとりの生徒に対して，この子を成長させるにはどうすればいいんだというのをいつも考えていないといけない．

中原　スポーツの世界で練習は嘘をつかないといいますけど，指導者自身が常に鍛錬を怠らず，レベルアップしていくことがゆるぎない自信になっていくんでしょうね．

佐野　そう思います．

指導者どうしが切磋琢磨していく仕組み

中原　そこで一つ思うのですが，日本のフィギュア界は，それこそ佐野さんはもちろん，渡部絵美さんから始まって，最近の安藤美姫選手や浅田真央選手，男子でも高橋大輔選手に羽生結弦選手と，連綿と途切れずトップ選手を輩出し続けています．それは選手もそうですが，よい指

導者が育成される伝統，基盤があるのではないかと思うのですが，どういうところに秘訣があるのですか．

佐野　これは，私の持論なのですが，日本のリンク事情の悪さが，結果的にいい方向に向いているんだと思います．

中原　フィギュアスケート界の環境が悪いんですか．

佐野　ある意味でね．というのは，リンクが少ないので選手も指導者も同じリンクに集まるんです．たとえば，アメリカだとリンクがたくさんあるので，他の選手，指導者とかぶらず，まるで専用リンクのように使える．

中原　そう聞くと，環境はよさそうですが．

佐野　そうなんです．でもそのために，井の中の蛙になっちゃう．さっきも言いましたが，指導者は「俺が一番教えるのがうまい」と思っていないといい指導はできません．でも，その自信の裏付けになるのは，指導者自身がレベルアップすることです．その点，日本では，指導者が同じリンクに詰め込まれるので，「俺が一番」と思っていても，となりの先生を見ると，なんだか新しいことをやっている．すると，自分は焦るわけです．「なに，あんなことやっているのか」と．

中原　指導者も切磋琢磨しているんですね．

佐野　そうです．そういうように，指導者が集まるリンクが日本に何箇所かあるんです．それから，毎年７月に，新人発掘合宿があります．日本全国の小学校４，５，６年，中学１年までの子どもたちを呼んで３泊４日で実施するんですが，それぞれの地域で切磋琢磨していた先生たちが，今度は全国規模で集められるので，そこでまた，いろいろなことを学ぶわけです．こういう機会があることも大きいと思います．

中原　生徒だけではなく，先生が育成されていくシステムがあるということですね．今日は貴重なお話をありがとうございました．

1977年の世界フィギュアスケート選手権（東京開催）で男子シングル3位となり，日本人初の銅メダルを獲得した場面　©株式会社JFA（佐野稔事務所）